

大学運動部活動における主将のリーダーシップと

集団効力感に関する研究

スポーツ経営組織学ゼミナール 1313027 高鷹達

1. 研究動機・研究目的

永尾 (2007) は、スポーツ競技場において選手のやる気を高め、それを高めることは選手・チームを成功へ導くために必要不可欠であると述べており、スポーツ競技場においてやる気を高める要因として組織のリーダーのリーダーシップスタイルが影響すると考えられる。チームスポーツにおいては、個人レベルだけでなく集団レベルでの心理的要因が重要であると考えられている (猪俣ら, 1991)。Bandura (1997) は自己効力感を集団レベルに拡張した集団効力感 (collective efficacy) という概念を提唱しており、近年ではスポーツ心理学の分野でも注目されている。集団効力感に影響を及ぼす先行要因については、特に資源 (resource) と呼称され、事前のパフォーマンスや集団サイズなどの存在が指摘されている (Zaccaro et al., 1995; Carron et al., 2005 永尾ほか, 2010) が、リーダーのリーダーシップスタイルと集団効力感の関連性は明らかにされていない。また、大学における部活は学生達が自ら考え話し合い活動を運営する集団であることから、学生の様々な成長を促進できるものだと期待されている (不動, 2004) こと、我が国における集団効力感の研究に目を向けてみると依然として研究例が少数であること (阿江 2008) も考慮し、本研究では大学運動部活動におけるリーダーのリーダーシップスタイルとその組織の集団効力感との関連性を明らかにする。

2. 研究方法

【調査対象】

関東圏の大学運動部活動に所属する学生 (n=349)

【調査期間】

2016年10月17日～27日

【調査方法】

質問紙調査

- ①フェイスシート
- ② 日本語版スポーツ集団効力感尺度
- ③ 主将のリーダーシップ尺度

3. 主な結果と考察

「スポーツ集団効力感は、主将のリーダーシップと相関がある」という理論仮説は研究結果から指示された。Vargas-Tonsing & Bartholomew (2006) は、コーチ (指導者) のや

る気を高めるような言葉がけが集団効力感の向上につながることを示唆している。同輩型のリーダーとして組織を導くキャプテンに対するチームメンバーの効力信念 (George & Feltz, 1995) も集団効力感への影響因としての可能性が示されていることから、本研究ではスポーツ集団効力感と主将のリーダーシップには関連が見られたと考えられる。

また日本語版スポーツ集団効力感尺度の各因子、合計得点において主将のリーダーシップ尺度の得点のその他の群は、高群よりも有意に高い結果を示した。集団効力感は自己効力感を集団レベルに拡大した概念であり、その資源も理論的に自己効力感と同じであると考えられている (Feltz et al., 2007)。獲得資源の中でも「行動の達成」は過去の自分たちが実際に行動して成功した経験から、同じ行動に対して「自分たちはまたできるだろう」という遂行可能感が高まると一般的に考えられている。Hodges & Carron (1992) や Lirchacz & Partington (1996) は、集団効力感は先のパフォーマンスに基づいて増減することを示唆しており、主将のリーダーシップ尺度の得点の高群がその他の群よりも有意に高い結果を示さなかったのは「行動の達成」に基づく各部活動の当時の競技成績を考慮できなかったことが原因であると考えられる。

4. 結論

本研究から得られた結果は以下のとおりである。

- (1) 大学運動部活動における主将のリーダーシップと集団効力感には相関がある。
- (2) 主将のリーダーシップの高群とその他の群 (中群、低群) では、スポーツ集団効力感の得点に差がある。
- (3) 大学運動部活動生の3つの立場 (レギュラー・準レギュラー・非レギュラー) では、主将のリーダーシップの得点、スポーツ集団効力感の得点に差がある。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文の執筆にあたりアンケート調査にご協力していただいた皆様に心より御礼を申し上げます。そして、2年間ご指導をいただいた水野先生に心より感謝を申し上げます。水野先生には、普段のゼミナール活動や、就職活動においても温かいご指導を賜りました。至らない点も多く、たくさんのご迷惑、ご心配をおかけしましたが、水野先生のご指導・ご鞭撻のおかげで充実した大学生活を送ることができました。ありがとうございました。

同期の11人には2年間のゼミ活動の中でいつも刺激をもらっていました。部活とゼミのバランスが上手くとれなかった私に厳しくも思いやりのある言葉をいつもかけてくれたのは同期のみんなでした。ぶつかることも多くありましたが、「組織論」を研究する者として組織で生きることの本質的な部分を経験的に学ぶことができたと思います。最後になりますが卒業論文の執筆に際しまして、改めて多くの方に支えられながら私が充実した大学生活を送ることができたと思感しています。両親をはじめ家族の支えが何よりのエネルギーになっていました。ここまで、支えてくださった皆様、本当にありがとうございました。